

～重症熱性血小板減少症候群（SFTS）患者の発生について～

- 令和5年（2023年）3月17日、県内で、今年3例目となる重症熱性血小板減少症候群（Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome：以下「SFTS」という。）の患者が発生し、3月20日に亡くなられたことを確認しました。
- SFTS患者の死亡が確認されたのは、今年1例目です。平成25年に届出対象疾患となって以降、本県での患者確認は38例目、患者の死亡確認は8例目となります。
- SFTSは、SFTSウイルスを保有するマダニに咬まれることで感染するといわれ、感染予防策としてはマダニに咬まれないようにすることが重要です。
- 森林や草地などマダニが多く生息する場所に入る場合には、長袖、長ズボンを着用するなどマダニに咬まれないよう十分な対策を講じて下さい。袖やズボンの裾に隙間ができないよう、できるだけ肌の露出を少なくするよう注意して下さい。

＜患者の概要＞

（1）患者

女性（78歳）、上益城郡在住

（2）職業

無職

（3）症状

下痢、発熱、全身倦怠感、血小板減少、白血球減少等

（4）経過

時折、家庭菜園で草取り作業。

3月6日：腕に黒いかさぶたがあるのに気づき、御船保健所管内のA医療機関を受診。

3月16日：発熱等の症状があり、熊本市保健所管内のB医療機関を受診、入院。

3月17日：医療機関でダニ媒介性疾患を疑い、熊本市保健所を通じて、市環境総合センターに検査を依頼。

血液についてSFTS陽性確認。

3月19日：入院後、症状は落ち着いていたが、急変。

3月20日：入院先のB医療機関にて死亡。

■重症熱性血小板減少症候群（SFTS）とは

- ・重症熱性血小板減少症候群（SFTS）は、マダニに咬まれることで感染し、6～14日の潜伏期間を経て発症し、発熱、消化器症状、リンパ節腫脹、出血症状などを伴います。致死率は6～30%とされており、治療は対症療法となります。
※マダニは、衣類や寝具に発生するヒョウダニなどの家庭内に生息するダニと異なり、主に森林や草地に生息、全国的に分布しています。

■ダニ媒介性疾患の予防対策

- ・今回確認されたSFTSはダニ媒介性疾患の1つです。
- ・ダニ媒介性疾患の感染予防対策としては、ダニに咬まれないようにすることが重要であり、以下の点に注意して下さい。
 - ① 森林や草地などマダニが多く生息する場所に入る場合には、長袖、長ズボン、足を完全に覆う靴などを着用し、肌の露出を少なくすること。DEETやイカリジン（虫よけ剤の成分）を含む虫よけスプレーも有効です。
 - ② 屋外活動後はマダニに咬まれていないか確認すること。
 - ③ 吸血中のマダニに気がついた場合、マダニに咬まれた後に発熱等の症状があった場合は、医療機関を受診すること。
 - ④ 野生動物や飼育している動物に注意すること。

■熊本県でのダニ媒介性疾患の年間発生件数（今回の事例を含む） R5. 3. 20 現在

年	H18～H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	合計
SFTS※	6件	1件	1件	5件	2件	6件	9件	5件	3件	38件
日本紅斑熱	146件	19件	14件	7件	6件	17件	20件	22件	0件	251件
つつが虫病	85件	20件	10件	10件	11件	14件	8件	5件	0件	163件

※SFTSは、平成25年3月4日から届出対象疾病となった。

記録が残っている平成18年以降の死亡例は、日本紅斑熱4件、つつが虫病0件、SFTS8件です（別に、感染症死亡疑い者の遺体からのウイルス検出が平成28年に1例あり）。

○日本紅斑熱

細菌であるリケッチアに感染することによって引き起こされる病気で、潜伏期間は2～8日、発熱、発疹、刺し口が主要三徴候であり、倦怠感、頭痛を伴います。抗菌薬を投与しません。

○つつが虫病

ダニの仲間であるツツガムシに咬まれることで感染し、5～14日の潜伏期間を経て、典型的な症例では、39℃以上の高熱を伴って発症し、その後数日で体幹部を中心に発疹がみられる。また、患者の多くが倦怠感、頭痛を伴います。治療法は、抗菌薬の投与です。

（お問い合わせ先）

健康危機管理課 感染症対策第二班 担当：大和、槐島
電話：096-333-2240（直通）（内線33143）